
祈り星*七夜の物語

蒼月緋焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祈り星* 七夜の物語

【Nコード】

N0544T

【作者名】

蒼月緋焰

【あらすじ】

七夕のある日、それぞれがそれぞれの地で思う事。それは、今の幸せであったり、誰かの無事であったり、大切な人との繋がりであったり。この物語は…7人のそんな願いの物語。七夕にのみ願う…7人の願いの物語。

祈り星*七夜の物語について

この小説は2007年7月7日に、七夕企画そして3セブンにちなんで私が勝手に命名した『FF?デー』の企画としてメルマガで配信した小説です!!7にちなんで、7日間・7人の七夕の話を書いております!!一部、BL要素が入っているものもございますのでご注意ください!!

【第一夜】

視点：クラウド（CP：クラウド×ティファ）

【第二夜】

視点：空&六（CP：無し）

【第三夜】

視点：ザックス（CP：ザックス×エアリス）

【第四夜】

BL小説

視点：ロッド（CP：レノ　ロッド）

【第五夜】

視点：ヴィンセント（CP：ヴィンセント&シエルク&ルクレツィア）

【第六夜】

BL小説

視点：レオン（CP：レオン×クラウド）

【第七夜】

視点：エアリス（CP：?????×エアリス）

【後書き】

七夜の物語【第一夜

Side・Cloud】(前書き)

クラウドとティファ…星を守った2人が、この夜に願う事とは…？

七夜の物語【第一夜】

Side:Cloud】

子供の頃はよく、母さんと天の川を眺めていた。
笹の葉に、沢山の願いを書いてぶら下げて…。

その殆どは、下らないものばかりだった。

その殆どは、叶わないまま。

けど、一つだけ……。

空に輝く、満天の星。

何度見ても、この幻想的な光景は見飽きる事は無い。

この星に存在する何よりも美しい光景に思える。

それと同時に、俺達が生活を営んでいるこの星がとてもちっぽけな存在に思えてきて…なんだか少し、おかしく思えた。

もしも他の星に、俺達のような人間が暮らしているなら、きっと俺達の星もあの小さな点の1つにしか見えないはず。

だとしたら…この星も、どこかの世界で「美しい」と思ってくれ
人がいるのだろうか？

……だがそれは、この星の出来事を知らないからこそ言える事。

この星で起きた全ての出来事を知っている俺にしてみれば…

とても醜く、汚れて見える。

本当に、輝いて見えるのだろうか？

「クラウドッ！！」

不意に呼び止める、聞きなれた声。

「…ティファ…」

俺の横には、ティファの姿。彼女だけじゃない…

「わあっ！！きれい…！！！」

「晴れて良かった！！じゃなかったら、こんなにきれいに見えなかったって！！！」

マリンとデンゼル。俺の、家族…。

「ね、クラウド…何を考えていたの？」

俺の隣に座りこんだティファは、楽しげに尋ねる。

「……この星も、あんな風に輝いて見えるのか…そんな事を考えていた。」

ティファは意外そうに驚いていた。そして、クスクスと笑い出す。

「……おかしいか……？」

「いいえ、そうじゃなくて……ふふっ、なんだかとても素敵だな、って……そう思ったの。」

「そうか……。だが……本当に輝いて見えるのか……。俺にしてみれば、この星は……」

そこまで言った時、ティファは小さく横に首を振った。

「確かに、この星では色々な事があった。とても傷ついてしまったけど……だからこそ、きつと輝いて見えると思う。」

そして笑いながら、さらに続ける。

「頑張つて、輝こうとしているから……一生懸命、元の輝きを取り戻そうとしているから……きつと、他のどの星よりも輝いていると思う。傷付いてしまったからこそ、強く逞しくなれるの。」

その言葉は、妙に説得力があつて……なんだかとても、納得できる。ティファらしいと言え、らしい言葉だ。

「けど、これは……人にも言える事だと思うの。」

「……人にも……？」

「ええ。だって……」

真っ直ぐと俺を見据えるその視線は、とても優しく穏やか。

「クラウドがそうだから……」

俺に向けられたその言葉……。あまりにも意外すぎて、思わず目を見開いてしまった。

「俺……が？」

「そう、クラウドが。だから私は……」

その言葉の続きは無く、その代わりにティファは俺の肩へと頭を乗せた。

ずっとずっと前の七夕の日。

俺は短冊に、ある願いを書いた。

叶わないだろうと、諦めていた願い事……。

「ティファ……」

ずっと忘れていたけれど……

「なあに、クラウド……」

今ようやく、思い出した。

「……ずっと、傍にいてくれ……」

「うん…もちろんよ。私もずっと、クラウドの傍にいたい……」

あの日の願いは、叶っていたんだ……。

もう絶対に、この幸せを手放しはしない。
ティファをそっと抱き寄せて、強く抱きしめそう誓った。

そしてその日、俺は新たに願いを書いた。

小さな短冊に、大きな願いを。

「クラウド、今頃願い事かよ…遅いつて!!」

「いや、まだ大丈夫だろう…。七夕はまだ、終わっていないから……」

「何々？クラウド、何て書いたの？」

「秘密だ。」

「えー、つまんない!! 教えてよー!!」

「どうせ笹に飾るんだから、その時に見たらいいんだ!!」

「あ、そっか!! クラウドの願い事、楽しみ」

「やれやれ……」

「ふふっ、大変ですね…お父さん…?」

それは過去、
叶わないだろうと、諦めていた願い事…

『ずっとティファと一緒にいたい』

そして今、

叶えたいと思う、俺の願い事…

『家族皆で、いつまでも笑っていたい』

俺は願う。

今日という日に、この願いを。

俺は祈る。

祈り星に、この願いを…。

【Side…Cloud…Eco】

七夜の物語【第二夜

Side : 六サス&空】（前書き）

それは同じ存在でありながら、違う意思を持つ者達の願いだった。
心を持つ者、持たぬ者。しかし…それでも、願いはあるのだ…。

七夜の物語【第二夜

Side：六サス&空】

分からなかった。

知らないはずの、この光景を何故俺は知っているのか。
分からなかった。

俺は一体、この星空をどのように思っているのか…。

俺は今、いつもの場所に居る。時計台の上に。どうやら今日は七夕らしい。そのせいもあり、街はお祭り騒ぎだった。そんな雰囲気はどうしても好きになれない俺は、他の機関の連中に適当な理由を言っ
てココに来た。

空を見上げれば、満天の星空。

帯状になった、星…。

どうやらこれが、天の川というやつらしい。けどそれは、最近生まれた俺が知り得るはずの無い情報。だったら何故、俺はこの事を知っているのだろうか…？それだけじゃない。今日が七夕という事も、街に出る前から、他の奴らに聞く前から知っていた。一体、何故…？

そんなこと、今考えても分かるはずも無い。だったらそんな無駄な事はもう止めよう…。

俺は、最近よく思う。

世界は何て狭いのだろうか。

沢山の世界が点在しているのに、何処へ行ってもとても狭く感じてしまう。

だが…この空はどうだ？

まるで無限に広がっているかのように感じてしまう。

この星空と同じものが、別の世界へも繋がっているんだ。

世界はとても狭く見える。

だが、この空は…

とてつもなく、広く見えるんだ。

何処までも繋がる、この天の川…。

俺達に、感情なんてものは存在しないから、何て言ったらいいのか分からない。どう言葉に現したらいいのか、分からない。

もし…

もしも、何か言葉で例えるならばきっと…

「綺麗…なんだろうな…」

心が無い俺には、その言葉に心が込められない。

どうしても、形だけの言葉になってしまう。

心を込めて言いたいはずなのに、

その心が存在し無いから、

とても虚しくなってしまう。

『わーっ!!綺麗だなー!!』

夢に出てきた、彼のように…

何も考えず、素直にこの言葉が言えるなら…

こんなに

苦しむ必要も、

悩む必要も…

何も無いのに。

「……………馬鹿馬鹿しい…」

結局、今の俺には…

心が無いから、何も分かりはしないんだ。

心が無いはずなのに、

心が痛む理由も…

泣きたくなる理由も…。

願いたい。

心がほしい。

祈りたい。

心が…ほしい。

他には何もいらぬ。

地位も、名誉も。

ただ、俺は…

夢の中のアイツみたいに、

心を込めて言葉が言えるだけで…

心のそこから笑えるだけで…

ただそれだけで、俺は十分なんだ。

俺は願う。

そして祈ろう。

この空に輝く、祈り星に…。

知りたかった。

あの涙の理由を。

知りたかった。

彼ならこの星空を、一体どのように思うのかを…。

こうして落ち着いて空を見上げるのは、一体どれ位ぶりだろうか？陸

を探して、王様を探して、俺達の島に帰る事を目指してたら…どうしても、空なんてゆっくり見上げる余裕なんてなかった。けど今俺は、いや俺達は…

「綺麗だね…」

「ああ、晴れて良かった…」

「久しぶりに、3人で七夕だな!!」

こうして3人揃って、俺達の慣れ親しんだ島で…

空に輝く天の川を見ている。

この時間を取り戻す為に、俺達は沢山傷付いて、そして沢山苦しんだ。

とても、とても…長い時間を掛けて。けど悲しみの数だけ、喜びも、笑いもあった。だからこそ、今があるんだ。

「こうして見るとさ、やっぱり世界は広く見えるよな…」

今更だけど、そう思えてしまう。

世界に出るまでは、この俺達の世界が全てだったから「何て狭いんだろう」って思ってた。けど、いろんな世界を知ったから…とてももなく、広く思えてしまう。そしてなんだか、不思議な気分になるんだ。

「どうしたんだ、急に…」

「だってさ、この星空は他の世界にも繋がってるんだ…不思議だろ？」

どの世界でも、空は当たり前のように存在していて、昼は太陽が、夜は月と星が空を照らしていた。この世界だけでなく、全ての世界が…。

「この天の川…他の世界でも見えてるのかな…」

「ふふつ、なんだかとても素敵だね…!!」

「それを空が言っと…なんか、ロマンチックの欠片も無いけどな…」
「なんだとっ!!」

俺達が旅して来た世界、出会った人々も…今、この空を見上げているのだろうか…?

「レオン達も見てるのかな…」

「…きつと、見てるだろうな…」

……やっぱり、世界は広いや…。

「ねえ、空…六サスや波音も…見てるのかな…?」

そうだな…

「きつと見てるよ。俺達が見てるだろ?きつと六サスも、波音も…
見てる。悪セルだって…きつと、何処かで見てる…」

そしてきつと思ってる。

綺麗、だと…。

心はなくても、きつと感じる。

いや、きつと心は存在している…。

だから悪セルは俺を助けてくれたんだ。

だから六サスも波音も、笑ってくれたんだ。

「空、海里…きつと見てるさ。六サスも、波音も、そして悪セルも…そして、『綺麗だ』と…そう思っている。絶対に…」

陸も言ってるんだ、きつと、間違い無い…。

「天の川…綺麗だな…」

「うん、そうだね…」

「本当に…」

何故かその時、俺の頬を雫が伝った。

俺の意思とは無関係に。

旅の始まりに、あの夕焼けの街で3人と別れる時に流した涙と同じように。

「…空？」

心配そうな海里の声が聞こえる。

「大丈夫、多分…俺じゃない…」

この涙はきつと…

その意味も、今の俺には分かる。

「ねえ、みんなで何か願い事しない？」

「あ、それいいな!!」

「そうだな…それじゃあ、皆で願おう…」

俺の願い事…

叶うかな…？

きつといつか…叶うよな？

「空は何をお願いしたの？」

「うーん…秘密!!」

「テストの成績が上がりますように、だろ？」

「そっだよなー、国語の点数最悪だったし…」

「ち、違っつて!!」

俺は願う。

会いたいんだ。

俺は祈る。

どうしても…会いたいんだ。

波音に、悪セルに、そして…六サスに。

会って話がしたい。

そして笑い合いたいんだ。

そして六サスに、どうしても言っておきたいんだ。

もう、悲しむ必要はないんだ、って。

もう、泣かなくてもいいんだ、って。

もう、六サスは独りじゃなんだ、って…。

俺達がいる。

だからもう…泣かないで…。

六サスが泣くと、俺もすごく…悲しくなる。

だから…一緒に、笑い合おう？

俺は願うよ。

そして、祈る。

この願いを、祈り星に…。

【Side…空&六サス…End】

七夜の物語【第三夜

Side:Zack】(前書き)

その男の願いはただ一つだった。他人にしてみればちっぽけな願いだったかもしれない。しかし、彼にしてみれば…それはとても大事な願いだったのだ。大切な“彼女”と…大きな空の下で、天の川を見る事が…。

あの子は、当たり前のように見える空が怖いと言ってた。だから俺が教えてあげるんだ。

この、満天に輝く星空は…
誰も拒みはしないのだと。

今日は任務も無く、仕事もオフだったから久しぶりに彼女の元へと訪れた。何処か行きたいところは無いかと聞いたら…

「ううん、ザックスが居てくれるなら…何処にも行かなくていい…」
と言っていた。なんか少し、恥ずかしかったけど…でも、すごく嬉しかった。

2人で教会の床に座り、俺が開けてしまった天井の穴から空を見上げた。空と言っても…ミッドガルを覆うプレートの間隙から見える、狭い空。その隙間から見えるちっぽけな空は、まるでそこだけ切り取ったかのように綺麗な青色をしている。

「綺麗だね…」

小さく彼女は呟く。

「エアリスは…外に出た事ある？」

「外…？外の世界…？」

「そっ、他の街とか、草原とか…行った事無いの？」

彼女は笑いながら、首を横に振った。ならばきつと、彼女はこの狭い空しか知らないはず…。

「な、エアリス…世界はすごく広いんだ！！この空も…ココからだと、プレートの間隙からしか見えないから狭く見えてしまうけど…本当は、ずっと…ずーっと…何処までも広がってて、世界の何処にいてもこの青空が上を覆ってるんだ…。ココから見える空よりも、外の世界で見る空の方が…ずっとずっと、綺麗なんだ…」

まるで俺達を優しく包みこむかのように広がる空が、俺はとても好きだった。何処にいても、見守っていてくれるような気がしたから…。

けど、エアリスは…

「そう…なんだ。けど、私…怖い…の。外に出たこと無いから、よく分からない。きつと外に出て空を見ても…素直に『綺麗』って言えないような気がする。」

当たり前広がる空を、怖いと言った。

予想外の言葉だった。

…そう…だよな…。

「そっか…怖いよな…。」

誰だって、そうだ。

「変…だよね…」

「いや…初めて見る光景を怖いって思うのは…当然だよ…」

俺にもあったはずのその感覚は、とつくに劣化してしまったから…忘れてしまっていたけど。エアリスはとても純粋な子だから…きっと、そういうことは敏感に感じてしまうんだろう。

ならば…

「じゃあさ…外の世界に出る時は、俺と一緒に出よう？そしたら…怖くないだろ？」

1人なら怖いかもしれない。

けど、2人なら…

「……そうだね…ザックスが居てくれたら、大丈夫だよ。きっと…」

無限に広がる青空への恐怖も、きっと消えて…素直に『綺麗』だと、そう思えるだろう…。

「ザックス…約束、ね？いつかきつと、私を外の世界に連れて行って？」

「おう、約束だ…！デートだ、デート…！」

その後、緊急の召集が掛かってエアリスに別れを告げた。何かと思えば…また、アバランチの事だった。

日付が7月7日に変わった丁度その時、俺の仕事はようやく終わっ

た。それと同時に鳴った、俺の携帯…。電話の相手は、エアリスから。

デートのお誘いだった。

「こらー、若い女の子がこんな時間に一人でスラム街なんて歩いたら危ないだろー!!」

言われた公園に向えば、すでにそこには彼女の姿。俺の言葉に悪びれた風もなく、ただただ笑っている。

「遅いよ、ザックス!! あ、でもお仕事だから…仕方無いね…」

「ごめんなー、まさかこんなに遅くなるとは…てか、いきなりどうしたんだ、エアリス? 急なお誘いだから、俺ビックリだぜ?」

「あ、他の女の子と約束してた?」

「してないって!! するわけないだろ、エアリスがいるのに!!」

どうやらエアリスは、俺をからかう事が楽しみたいらしい。それもまた…可愛いな、なんて思えてしまう辺り…俺って、ホントにエアリスの事が…

「それで…こんな時間にスラム街の公園に呼び出して…エアリスさんは俺に何のご用ですか?」

「ふふっ…今日、七夕でしょ? 真っ先に、ザックスと一緒に過ごしたいなって思ったの。」

そういえば…日付は変わったばかりかだけど、よくよく考えてみれば…今日は七夕か…。

「ここからね、空が見えるの。ザックスが知ってる空に比べたら小さくて狭い空だけど、私にしてみればどこで見る空よりもとても広くて大きな空…。」

彼女に言われて上を見上げれば、昼間見た空よりも少し広く大きな空が広がっていた。

「今日、七夕だから…ザックスと一緒に、星が見たかったの…。」

そのプレートの隙間から見える空は…

満天の、星空だった。

「天の川、見えるんだよね？けど、私は見た事無い。外の世界に出た事、無いから…。だからね、ザックス…」

俺の肩に頭を寄せ、満天の星空を見上げながら…

「来年の今日…もしもザックスの仕事が何も無かったら…私を外に連れて行って。天の川…一緒に見よう？最初は怖いかもしれないけど、ザックスがいてくれたら大丈夫だと思う。だから…」

微笑んでいた。

見せてあげたい。

こんな狭い、満天の星空ではなく…

本物の、満天の星空を…。

他の誰でもない、この子に。

「なら、願い事しなくちゃ!!」『来年の今日、ソルジャーの仕事が休みでありますように!!』『ってさ…』

「そうだね!!今からしつかりと、願っておかないと…!!」

願わなくてはならない。

どうかそれまで、俺の命が尽きないように。

祈らなくてはならない。

それまで彼女が、タークスに捕まらないように。

ずっと、ずっと…

一緒に、いられるように。

「約束だよ?」

「ああ、約束だ!!」

これが、彼女と交わした

最後の約束だった。

けどそれを知らない俺は、あの日エアリスと共に笑いながら祈った。

祈り星に、

ずっと、ずっと…

一緒にいたい、と…。

「ずっと、ずーっと…一緒だよ？」

「ああ、約束!！」

ただひたすら、祈り星に…。

【Side…Zack…End】

七夜の物語【第四夜】

Side:Road (前書き)

その男にとって“他人を信頼する”ことはどうしても出来なかった。しかし、その壁を越え…男は新たな願いを込める。叶うかどうかは自分次第。しかし、男の目はただ先だけを見据えていた。

初めて知った。

今日が特別な日なのだという事を。

俺の過去に“七夕”などという言葉は…存在しない。

初めて知った。

他人を認めるといふ事を。

俺の過去に“信頼”の二文字は存在しなかった。

「……………？何だ、それ？」

そこはタークス本部より少し離れたところにある、休憩室。任務以外の時、大抵オレはココにいる。理由は…まあ簡単に言えば、人の馴れ合いを避ける為。最近ではだいぶ慣れてきたが、まだ完全に“人間不信”から解放されたわけじゃない。色々あつた過去のせいで、他人を信用できなくなったオレ…。そんなオレが本部にいてもオレ自身それなりの態度しか取らないから…他の奴らは、あまりいい目では見なくなった。そんなのが煩わしくて、任務以外の時はいつもこの休憩室で過ごしている。ココなら煙草も吸えるし…。で、オレの横に居るこの男は、そんな人間不信のオレにはお構い無しに、やけに馴れ馴れしく付きまとう。いや、多分この男は…

「なんだあ？ロツド君は七夕を知らないんですか、と…」

オレをからかって遊んでるだけに違いない。けど正直な話…レノがこうしてオレから離れる事なく、普通に接してくれる事で人間不信

が少しだけ解消されたのも…また事実。悔しい話、どうやらオレはこの男に、何から何まで世話になりっぱなしだ。で、今日も例の如く…この男はオレの目の前に現われた。“七夕”なんて、意味不明の言葉を言いながら…。

「だから何だよ、その…“七夕”って…意味わかんねー…」

考えてはみるが、どうしてもオレの記憶にその言葉は存在しない。単にオレが忘れていただけか、それともコイツが適当な言葉を並べてオレの反応を見ているだけか、それともオレが知らないだけか…？

「七夕ってのはな…7月7日のロマンチックデーを指す言葉だぞ、と」

「7月7日の…ロマンチックデー？何だ、それ…」

ハッキリ言って、ますます意味が分からない。やっぱ、適当な言葉を並べてるだけか？

「言つとくが嘘じゃないぞ、と。カレンダーにも書かれてある、一般人なら誰もが知ってる年間行事…一般常識だ。……知らなかったのか？」

年間行事…ああ、どおりで聞いた事無いはずだ……。

オレの過去に、年間行事なんてものは存在し無い。

ガキの頃から親には道具のように扱われ、捨てられて。

生きてるのか、死んでるのか分からないような生活を繰り返してきたオレの過去に、一般常識なんてものは全く存在しない。

だから…

“七夕”なんて…聞いた事もないし、それが何なのかも知りはない。

「……………知らなかった。」

これぐらい、知ってて当然なんだろうな…。なんせ“一般常識”なんて言うくらいだ。大抵の奴らは、こういうオレの無知さを嘲笑い、哀れみの目で見ると。もうそんなのはごめんだ。だから、なるべく人とは関わらないと決めたはず。なのに何故、団体行動必須のタークスなんかには飛び込んだのか…。単に強くなりたかったからか？単にレノを超えたいと思っただけか？いいや…何かが違う…。だが、違わない事だつてある。

どうせレノも、オレを馬鹿にするんだろ？

別にいいさ。もう慣れてる。

けど、何でだろう…

アンタにだけは、分かって欲しいって…そう思ってしまった。

「ロッド…」

ああ、アンタのその声…呆れたって声だな。やっぱり…分かってもらおうって方が、無理なんだ…

「……………お前、今日がその日だって気付いてるのか、と」

だが、返ってきた言葉は…あまりにも予想外の言葉…

「へ？…あ、そういえば…今日、だっけ…？」

意外な言葉で、思わず変な声が出しまった。レノは一体…何を考えてるんだ？

「知らないんだろ？だったら、百聞は一見に如かず…本部に戻れ。それから教えてやる。」

オレの腕を掴み、半ば強引に休憩室を後にして着いた先は…タークス本部。

「おいつ、レノ…一体…!？」

コイツの考えてる事が、よく分からない。けど…

「俺は言った筈だぞ、と。『一般人なら誰もが知ってる』ってな…」
本当は…

「…俺も一緒だ。ココに拾われるまでは、何も知らなかったんだぞ、と…」

オレと同じなのかもしれない。

「だったら少しずつでも、知っていけばいい。知らない事を、学んでいけばいいだけの話だぞ、と…」

だからオレは、この男に…

ホンの少しだけ、心を許せていたのかもしれない。

だからこそ、オレは…

タークスに入ったのかもしれない…。

「…リヨウカイ…」

なんか少しだけ、嬉しかった。

オレの事を、少しでも分かってくれる奴がいる…

それだけで、十分オレは救われる。

「それから…」

「んだよ、まだなんかあるのか？」

「お前が思ってるほど、ココにいる奴らは悪い奴じゃないぞ、と…」

まさか、そこまで気付かれていたとは…予想外もいいところだ。レノの方に視線をやれば、してやったりと笑ってやがる。

「まあ、“人間不信”なんざ…そう簡単に克服できるもんでもないだろうが…逃げてても克服はできない…それもまた事実だ。ちったあ、当たって砕けてみるよ、と。」

それはコイツなりの、アドバイスらしい。

当たって砕ける、か…。

そしてオレ達は、本部へと帰還した。

「なんだ、コレ…?」

レノから手渡されたのは、一枚の紙切れ。これをどうしろっていうんだ…?しかしそれを聞くこうにも…レノはどっか行っちゃまったし。

……当たって砕ける。

今が、その時…か?

丁度傍にいたのは、同期のリーナ…。今まで散々話しかけてきたが、いつも適当に受け流していたら…オレに近寄りさえしなくなった奴。オレから声を掛けるのなんて…当然、初めて。

「なあ、リーナ…」

突然声を掛けられたリーナは、オレの姿を見てそりゃもう驚いていた。ま、当然か…。それでもオレは、構わず続けた。

「コレ、七夕だからって言われてレノに渡されたんだけど…何?」

一瞬、呆気に取られたかのような表情を見せたが、やがて…

「衝撃!!!貴方…短冊を知らないの!?!」

予想通りの反応。知らないから聞いてるんだろ、と言おうとしたが…

「ふふっ、いいわ…教えてあげる!!」

リーナはどこか嬉しそうに笑っていた。

短冊が何なのか、七夕が何なのかを一通り聞いていたら…

「あら？珍しいですね…2人が一緒なんて。」

任務を終えて、戻ってきたサラが声を掛けてきた。

「聞いて頂戴!!ロッドったら、七夕も知らなかったのよ!?だから今、教え込んでいるの!!」

「そうなんですか?…なんだか楽しそう。私も混ぜてもらっていいですか?」

そしてサラもまた、さっきのリーナみたいに嬉しそうな表情をしている。

ああ、そうか…

レノが言っていた通り…

確かに、悪い奴らでもなさそうだ…

「おー、盛り上がってるな、と」

それから暫くして、レノは何処からともなく現われた。一通り七夕と、短冊が何なのか聞き終わった丁度その頃に。

「レノ、お前何処行つてたんだよ!!」

「レノさんは忙しいんだぞ、と。ところで…お勉強は終わったのか、と」

「ええ、バッチリよ!!けどまさか、ロッドがこんなに世間知らずだったなんて…」

「んだと、リーナ!!」

「まあまあ…2人とも…」

ホント、何処行つてたんだこの野郎は。けど居なくなってくれたおかげで…オレは一步が踏み出せた。はー…また、借りが出来ちまったな…。

「で、ロッドは何か願い事は書いたのか、と」

「いや、ただけど…」

「だったら、貸してみる…」

オレの持ってた短冊を引つたくり、レノはそれにペンを走らす。何を書いたのかと思ったら…

『友達100人できますように』

「……おい、レノ…!!」

レノがふざけて書いた短冊への願い事…

当たらずも、遠からず…。

「ははっ、しっかり笹に飾ってやるぞ」と
「冗談!!返せ、このアホ!!」

やっぱオレは、この男には敵わない…。

その日、オレにとって初めての七夕の日…

レノが書いたのとは別に、願い事を書いた。

レノを超えてやる!!

願いというよりは、宣言にも近いその言葉を。

本当はもう一つ、願いがあったけど…

それは書かなかった。

だがどちらも、いつかは叶えたいオレの願い。

誰かに叶えてもらうようなものでもないけど…

それでも、今の願いはこの2つだけだから。

最初の一つは、もう既に…

「今日は天の川、見えるかしら…」

「天の川…？何だ、それ…？」

「天の川、知らないんですか…？」

「…？ああ、知らねーけど…？」

「そんなんじゃ、女の子にモテないぞ、と」

「んだと、この野郎！！」

今日、叶ったからな…。

短冊に書くまでも無かったんだ。

俺の願い…

一つは叶った。

もう一つは…多分、オレの努力次第。

残りの一つは…

果たして、叶うだろうか？

レノと一緒にいたい…ずっと、ずっと…

この思いが一体何なのか、オレにはよく分からないけど…

あの男はオレにとって、特別な存在。

だから…

オレは祈る。

この…

無数に輝く、祈り星に…

【Side…Road…End】

七夜の物語【第五夜】

Side: Vincent (前書き)

己の生は罪だと嘆いていた男。しかし、そんな男にも願いはある。
それは、大切に想っている人が静かに眠れることと、今隣にいる小
さな少女の幸せ、そしてこの平穏な時が永久に続くこと…。

七夜の物語【第五夜】

Side・Vincent】

私に、願うものなど何も無い。

ただこの平穏が、永久に続く事だけを
願い続けよう…。

ニブルヘイム。クラウドの生まれ故郷、そして…私にとって、もつとも忌まわしい地。だが、思い出される過去は苦しみや痛みだけではない。

「ここか…」

神羅屋敷より少し離れたその場所は、私と彼女がよく共に過ごした場所…。吹き抜ける風がとても心地よく、休憩時間になるとよくココに訪れ、2人で時を過ごしたものだ。だが…

「今ではもう見る影も無い、か…」

あの時の光景は、今となつてはもう跡形も無い。恐らくは、セファイロスが火を放ったその時に、全て失われてしまったのだろう。加えて、神羅屋敷で行われていたことを考えれば…土壌汚染…といったところか？どこに向かつて、あの男の残した傷跡は垣間見え、癒える事なく星を痛めつけている。私がどうしても許せなかった…否、今でも許す事の出来ないあの男…宝条。しかしもう、奴はこの星から消え失せた。私がこの手で、葬り去った…。

「これで、よかった…」

これで、全てが終わったのだ。

「これで良かったと…そう信じてもいいのか…？」

見上げた夜空に輝く星々…そういえば、今日は7月7日…。いつ頃の事だったか…まだ全てが上手くいっていて、何も起きていなかった平和なあの頃…。今日と同じ日付のあの日、私はここで彼女と…ルクレティアと…この、満天の星空を見上げた…。

『綺麗ね…天の川、私初めて見るの。』

『そうなのか？ココだったら、いつでも見られるだろ？』

『ええ、そうなんだけど…一人で見てもつまらないでしょ？こうして、誰かと一緒に見たかった。一人で見る星空よりも、二人で見る星空の方が…ずっと綺麗…』

『…そうだな…』

『ヴィンセントは天の川、見た事あった？』

『いや、私はミッドガル勤務だから…。あそこは星が全く見えない。空気が濁っているせいだろう。』

『そっか……だったら、ラッキーだったわね！！ココだったら、いつだって綺麗な星空が見られるわ！！そして、私も…いつでも綺麗な星空が見られる。ヴィンセントと一緒に……』

そう言いながら笑っていた彼女を、今でも鮮明に覚えている。あの時の私には、彼女の言葉の意味がよくわからなかったが、なるほど…

「一人よりも二人の方が…綺麗に見える…」

本当に、ルクレツィアの言った通りだった。

「……ヴィンセント？」

しばらくボンヤリと空を見上げていたら、私の背後から小さな声が聞こえた。振り向けば、そこには…シエルクの姿。

「どうかしたのか？ニブルヘイムに何か…用が？」

「いいえ特に何も。…ただ…」

シエルクは私の元へと歩みより、さっき私がしていたように夜空を見上げた。

「彼女が見た光景を、見てみたいと思ひまして…」

その眼差しは、かつてDGソルジャーに身を置いていた時のものは異なり、とても穏やかなもの。

「…そうか…」

そしてまた、私も同じように空を見上げた。

「綺麗…ですね…」

「そうだな…。」

小さく囁いた彼女の口元は、自嘲気味に歪んでいた。

「……どうした？」

「いえ、ただ……“綺麗”だなんて思える感情など、とつくに劣化していると思っていたので……」

一瞬垣間見えた、切なげな表情。それがあの時の……

『言いたい事があるなら、ハッキリ言つて。』

全てが狂い始めた、あの時に見せた彼女のそれと酷似していた。

「不要なものだと思つていました。ただあの頃の私には、全ての感情を無くして“殺す”以外に道はありませんでしたから。けど……知つてしまつたから……」

だがあの時の彼女とは違つた、とても強い何かを……秘めている。

「本当に大切なものが何なのか、生きるという事がどういふ事なのか……その全てを知つてしまつたから、もう後戻りは出来ません。だったら私は……この先に待ちつけているであろう運命を、拒む事無く受け入れようと思ひます。」

とても前向きなその視線……自嘲で歪んでいた口元は、いつのまにか微笑みへと変わつていた。

「そうか。シエルクがそう思うなら……そうすればいい。その先に待ちつけているものが何であれ……信じればきつと、前へ進める。」

クラウドがそうだったように……。

私にだって出来た事だ。シエルクに出来ないはずが無い。シエルクはとても強い。だから、きつと…。

「そうですね…。ヴァインセント、有難うございます…。」

一体その礼の意味は何なのか…説明を求めるように、視線をやれば…

「私がこうして、綺麗なものを綺麗だと思えるようになったのも、前に進むきっかけを与えてくれたのも…あなたでした。今は、それに対するお礼です。」

そう言っただけ、微笑っていた。

いや…そうではない。

むしろ、礼を言わなくてはならないのは…

「礼を言うのは私の方だ。…シエルク、お前のおかげで私はココに存在している。…ありがとう…」

私の言葉に、彼女は小さく首を振る。

「違いますよ。あなたが生きているのは、ルクレティア・クレシエントのおかげ…お礼なら、彼女に言ってあげてください。私はただ、彼女の手伝いをしたまです。」

「だがそれは、シエルク自身の思いがなければ為されなかった事…きつと彼女も、シエルクに感謝している。そして、私もだ。…ありがとう…」

再びの言葉に、彼女は戸惑うように視線を廻らす。どうしたのかと

尋ねたら…

「今まで、お礼というものを言われた事がなかったもので…どうしたらいいのか…」

「どうやら、彼女なりの照れ方らしい。」

「それもまた、彼女が初めて体験した事なのだろう。」

「だったら少しずつ、知り得なかった事を覚えていけばいい。」

「焦る事は無い。」

「時間は、たつぷりとあるのだから…。」

「天の川、ですか…綺麗ですね…」

「ああ、綺麗だな…」

「きつと、あなたが隣にいるから…尚更綺麗と感じるのでしょうかね…」

「…そうだな…」

「一人で見る星空よりも…」

「二人で見る星空の方が…」

「ずっと、綺麗だ…。」

私に願いたい事は存在しなかった。

だがもしも何か願いを叶えてくれると言つたらば…

一つだけ願ひがある。

どうか、この平穩な日々がこれから先、壊れる事なく…

永久に、続くように…

私は祈ろう。

この暗闇をも照らし出す…

祈り星に…

【Side：Vinncent…：End】

七夜の物語【第六夜】

Side・Leon (前書き)

ただ…そばにいて欲しい…男の願いはそれだけだった。愛する者に、いつもそばにいて欲しい。しかし、男の願いはかなうこと無く…愛しき者は、己の闇を消すために…世界へと身を投じる。

俺の願い。

その存在を、もう手放したくは無い。

だがそれは、きつと叶わぬ願い。

お前が闇と戦い続ける限り…。

気付いた時は既に、深夜の2時を回っていた。横には寝ているクラウドの姿。その額には汗が滲んでいる。

「少し、無理をさせてしまったか…」

そつと髪をかき上げれば、現われるその素顔。元ソルジャーだなんて強がってはいても、こうしてみるとまだ幼さがどこことなく残っている。そんな事をコイツに言ったら、凄まじい勢いで怒るだろう。その姿が安易に想像できて…笑えてくる。

「そこがまた、子供っぽいんだが……なあ、クラウド…」

そのまま髪をそつと撫で、その額に口付けを落とす。クラウドは小さく唸ったが、それでも起きる気配は無い。どうやら…少し深めに寝入っているようだ。ならばせめて、今この時ぐらいは…休ませてやろう。これから先、きつと休む暇さえ無くなるほど…忙しくなる俺にとつても、そしてクラウドにとつても。本当は俺も休んだほうがいいのかもしれないが…何となく、そんな気分にはなれなかった。それはきつと、今日が特別な日だからだろう。

「今年も雨か…やれやれ、この時期は毎年これだ…」

7月7日…七夕。だがここ最近、この時期なるといつも雨。それこそ…俺達が剣を手に取り戦い始めたあの頃から。まるで世界が泣いているかのようじ。

「もうずっと、見ていないな…」

この分厚い雲の上は瞬いているであろう、天の川を。

「そんなに前から、見てないっけ…?」

不意に聞こえてきたその声のする方へ視線をやれば…どうやら、目を覚ましたらしい。

「起きたのか…もう少し休んでいたらどうだ？」

そこには、横になったまま俺を見上げるクラウドの姿があった。

「いや、目が覚めてしまった…。スコールこそ、休んだらどうだ？」

「俺はいい。そんな気分にもなれないしな…」

再びベッドに腰を落とし、そつとその頬に触れると拒む事なく受け入れる。そしてまた、口付けを落とした。額ではなく…

「……………」

その唇に。

触れるだけの口付けを交わした時、クラウドはふわりと笑った。

「最近、「スコール」って呼んでも怒らなくなったな。どういう心境の変化だ？」

「さあな…」

いつものようにはぐらかせば、納得いかないと言わんばかりの表情を見せたが、やがて諦めたのか「しょうがないな」と小さく呟き視線を逸らした。その視線の先は、窓。いや…窓の外と言ったほうが正しいのか…？

「今年も雨なんだな…」

さっきの俺と同じように、呟く。

「そうらしいな…。」

降り止むどころか、ますます雨脚を強めるその空模様は…ハッキリ言って、星空なんて期待できない。どうやらまた、今年の七夕も雨のまま終えてしまいそうだ。

「天の川…もう一度、見てみたいものだ…」

もうずっと見ていないその幻想的な光景は、遠い日の思い出になりつつあった。

「何年前だったか…まだお前が小さかった頃、七夕の日にユフィと大喧嘩をしたのを覚えているか？」

「…そういえば、そんなこともあったな…。スコール、なんでそんなどうでもいい事ばかり覚えてるんだ…」

「あれは止めるのが大変だったからな。鮮明に覚えているぞ。」

「いい加減、忘れるよ……」

こうして少しずつ、何もかもが思い出になってしまふのだろうか？
こうして、クラウドと共に過ごした事も……。

世界に異変が起き、故郷を離れたあの日……クラウドと離ればなれになったあの日も、丁度今日と同じ日だった。そしてその日も今日と同じく、雨だった。

そして恐らく、また……

この隣存在は、日付が変わると共に姿を消すに違いない。

己の闇と、戦う為に。

「クラウド……お前はまた、明日になると同時に行ってしまふのか？」

「……………」

返事は無い。それが何より、肯定を示している。

「俺の願いは……………」

口に出しかけたその願いを遮る様に、クラウドは強く言い放った。

「俺の戦いはまだ、終わっていない。俺の闇……あの男を倒すまでは、ここに留まり続けるわけにはいかない。奴を倒さなければ、また全てを失ってしまう……。それだけはもう、ごめんだ。」

その眼は真っ直ぐと、どこか遠い場所を見つめている。きっとクラ

ウドはその視線の先に、あの男の姿を捉えているに違い無い。あの男を倒す事が、クラウドの望みというならば…俺に、それを止める権利も資格も無い。

「明日、日付が変わると同時に…俺はココを発つ。そして今度こそ、俺は自身の闇に打ち勝つ。そしたら必ず、真っ先にスコールの元に戻ってくる。約束だ。絶対に…」

そつだな。お前ならきつと、成せるだろう。

ならば俺は…

「お前が闇に打ち勝つその日を楽しみに待っている。そして、そのあかつきには…城壁広場で共に、天の川を見よう。」

俺の言葉に驚いてはいたが…

「ああ、そつだな。その時は…晴れるといいな…」

その表情は、とても穏やかだった。

そしてまた、彼は眠りに付いた。

深く、深い眠りに。

俺は眠る事なく、ただクラウドの横に居続けた。

俺の知らないうちに、消えてしまわないように…。

無理だと分かっているけど、願ってしまふ。

それはきつと、今日という日だから。

「もつどこにも行かないでくれ……」

あるいは、叶うかもしれないと、淡い期待を抱きながら……。

その日の日中、クラウドは忽然と姿を消した。
空から聞いた話によると、銀髪の男との戦闘中に急にその姿を消したらしい。

「全く、お前という奴は……約束も守れないのか……」

日付が変わると同時に発つと言っていたが……半日を過ぎたその時に、クラウドはまたどこかへと旅だってしまった。別れの挨拶も無いままに……。

「クラウド……」

次に会える日を焦がれて待つなど……まるで七夕の話に出てくる2人のようだ。

だが、俺は信じて待つ。

いつかきつと……

共に、天の川を見る日が来る事を。

ずっと、飽くほど…

共にいられる日が来る事を…。

叶わなかった、俺の願い…。

まるでこの、空に覆う雨雲が邪魔するかの如く…。

それでも、俺は願ひ続けよう。

いつかきつと、帰ってくるようにと…。

雲の向こうに隠れていても、

ひたすら輝き続けている…

姿見えぬ、祈り星に…

【Slide…Leop…Eco】

七夜の物語【第七夜

Side: Aeriith】(前書き)

それは、彼女の願いだった。どこかに行ってしまった大切な者の無事を…ただただ、ひたすら願っていた。“彼”が無事であることを…。

今の私にはきつと、
待つ事と願う事しかできない。
あなたとの再会と、
あなたの無事を…。

ねえ、あなたは今どこに居るの？
私はいつでもココにいる。
あなたと共に、笑って過ごしたこの場所に。

今年もまた、七夕の季節がきた。
前はよく、一緒に天の川…見たよね？
今年もね、天の川…綺麗に見える。
あなたと見た時と同じように。

……でも…

その光景は同じはずなのに、
私の隣にあなたは居ない。

だからかな？
見上げた空が、滲んで見えるの。

ちつとも、“綺麗”って思えない。
あなたが居ないだけで、こんなにも星空が違って見えるなんて。
ううん、星空だけじゃない。

世界が違って見えてしまう。
ただ隣にあなたが居ないだけなのに…
私の心には、ぽっかりと穴が開いたみたい。

毎日のように、当たり前前に会えていたあの日々が、まるで遠い日に
見た夢のよう。

けど…夢じゃない。

あなたは確かに、私の目の前に存在していた。

突然、私の目の前から消えてしまったあなた…。

突然、無くなってしまった当たり前の日々…。

神話に出てくる織姫と彦星も、今の私と同じなのかな？

今日、この場所に来たのは…

淡い期待を抱いていたから。

もしかしたら、帰ってきてるかもしれないと…そう思ったから。

けど…

開いた扉の向こうに、あなたはいなかった。

やっぱり、と思ったけど…

それと同時に、どうして？って思ってしまった。

いつもの私なら、これぐらい笑ってやり過ごせるのに、
今日に限って…

それが出来なかった。

何度もあなたの名前を呼びながら、私は…

ねえ…あなたは今、どこにいるの？
この世界のどこかにいるの？
それとも、別のどこかに旅立ってしまったの？

でもきつと、いつか帰ってきてくれるよね？

私は信じている。

あなたがまたこの場所に、戻ってきてくれると。
またいつの日か、

一緒にこの天の川を見れる日が訪れる事を…。

信じていつまでも、待ち続けるよ。

「天の川…綺麗だよ。ねえ…君も…どこかで、この星空を見てるの
かな…？」

そうだったら嬉しいな。

例え隣に居なくても…

同じ光景を見ているのだから…。

世界中を流れる空の河、星の流れ…。

私はこの流れに、願いを委ねる。

あなたが無事でありますようにと。

私はこの流れに、祈りを委ねる。
あなたとの再会が果たせますようにと。

この願いがどうか、あなたのいる世界まで流れ着きますように…。
そしてどうか、あなたに届きますように…。

世界中で見る事ができるであろう、この祈り星に…

私は、全ての想いを託します。

叶う願い。

叶わざる願い。

7日の願い。

7人の願い。

そのすべての想いを乗せ、
祈り星は何を思う？

さあ、今度はあなたの番。
あなたは何を願いますか？
この、闇夜を照らす祈り星に…

七夜の物語【後書き】（前書き）

あとがき…というなのいい訳&反省会です（笑）

七夜の物語【後書き】

さてさて、今回の七夕企画ですが…一言で言い現しますと、本当に苦労したの一言に尽きます 毎日、1つ分の短編を考えるのがこんなに苦しいなんてorzけど書いていて、苦しい事もありました…同じテーマで、全く違う小説を7本書くのはとても楽しかったです!!中には不完全燃焼の話もありますが…それはいつの日か、リベンジしたいと思います(苦笑)それではとりあえず、1話ずつ簡単な内容説明と秘話なんかを書いてみようと思います(笑)

【クラウド視点】

時間軸はAC後で、ほのぼのとした家族の団欒…だったはずが!!いつのまにか、プロポーズが変わってしまった(笑)けど思いの他、スムーズに書く事のできた一話です!!クラウドを視点に小説を書く、いつもシリアスな内容になりがちなので、今回はこのような温かみのある話を書いてみました!!

【空&六サス視点】

時間軸は…六サスはゲーム開始直前、空はゲーム終了後となっています!!空と六サスを2人で一つの小説にするのは、それこそクラウド視点を書き上げる前から決まっていた事です!!内容も、この企画をすると決めて真っ先に決めたような気がします(笑)初めての王国小説、初めて扱うキャラ達だったので上手く書けるかとても不安だったのですが…思いのほか、スムーズに書く事が出来ました!!今回の中で、一番気に入っているのがこの2人の話です

【ザックス視点】

時間軸は…恐らく、CCの真っ最中じゃないかな、と(笑)「エアリスは空を怖いと言っている」「プレートトの隙間から見た空」「最

後の約束」これらをPVで聞いた時から、いつか書きたいと思っていたネタでした！！だったらCCが発売する前に書いてしまおうと思っていたのですが中々暇がなくて、今しか無いと思いこの内容となりました！！んがっ！！とても苦勞しましたよー エアリスの口調が掴めない上に、思いの外進め方が難しく、できは今回の中で、あまり宜しく無い方だと思っておりますorz（撃沈）

【ロッド視点】

時間軸はBC開始直前で、ロッドの過去とリンクさせながら書き上げるつもりでした。しかし…そんなことを思いながら書いてたら、予想以上に長い話になってしまい…泣く泣く、ロッドの過去が語られている辺りをごっそりと削ったという悲しいお話が（苦笑）CPは当初からレノロドと決めていました！！ただし、まだ付き合っていない、どちらかが片思い…という設定です！！最初レノが片思いしてる設定でしたが、ロッド視点でそれを書くのは難しく…結果、ロッドの片思いということになりました！！しかしながら、内容的には今回の中で一番悔いの残る作品です。いつかリベンジしたい…！！

【ヴィンセント視点】

時間軸はDC終了後しばらく経ってという設定です！！しっかし…一見、ヴィン×シエルクに見えますが、断じてそうではありません！！ヴィンセントはただ、シエルクを見守っているというだけで、恋心云々は考えずに書いたんです！！書いたんですけど…：…：そう見えてしまうよな…orzけど、これも比較的…私は気に入ってたりします

【レオン視点】

時間軸は、空vsセフィロス辺りのお話です！！セフィロスとクラウドが戦いの最中に消えてしまうあれです！！一番苦勞したのは、レオンの口調とクラウドの動かし方！！レオンの口調はそれなりに

なんとか出来ました。が…クラウドをどう動かすかは、本当に苦労しました（苦笑）あ、メルマガではお話したのですが…本編開始前、この2人は何をしていたと思いますか？（ニヤリ）…はい、いい事してました（笑）あと、この話だけ雨という設定でしたが…これも私が当初から考えていた設定です！…時間軸的には少々無理もありますが…結構、綺麗に纏まったんじゃないかと思っております！

【エアリス視点】

これだけは、他とはちょっと違っていきます！…エアリスが作中で言っている「あなた」とは一体誰なのか！…これは…2つの意味で取れるように考えております！…その二つの意味とは…FF？で考えた時と、王国で考えた時です！…FF？で考えた時の相手はザックス！…丁度ザックス視点とリンクするような形となりました！…で王国視点で考えた時の相手は、言うまでもなくクラウドです！…王国で考える場合でも、王国のクラウドと考えるか、王国？のクラウドと考えるかで、違った考え方も出来るな…と書いていたり（笑）けどやはりこれも、口調に苦労しました 何気にエアリスって…手ごわい！！（笑）

最後にもう一つ！！実はこの小説の配信順番…くじで決めました！（笑）いつぞやの日記で、そのくじの画像を付けて話しているのですが…毎日一個ずつ引いて、誰にするかをランダムで決めました！！ただクラウドだけは一番最初と決めていたので、くじからは外しております！！ちなみにくじを引いてくれたのは…母です（笑）

ここまでお付き合いいただき、有難うございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0544t/>

祈り星*七夜の物語

2011年5月26日10時36分発行